

萬葉に於て日本的感情を見る (六)

東京女子高等師範學校教授 石 井 庄 司

四、自然に親しむ

今年四月のはじめ北支を出發し、滿洲・朝鮮を経て内地に歸つてきた方の話に、「日本さいふころは、さうしてこんなに美しいのでせう。實にありがたい國だ。」といつて新緑の東京を賞め稱へてゐました。いつも見てゐるものは、その美しさ、良さに慣れて、ありがたさが分らなくなるのでありますが、たま／＼他處から歸つてきたやうな方には、よくわかるらしいのであります。さう思つて、自分の廻りのものに眼をやつてみますと、銀杏の若葉でも、楓の若葉でも、また萩の新芽にも、たまたらない親しさを覺えるのであります。ところが、萬葉の歌人たちは、既に千二百年のむかしに、この日本の自然に親しみ、その特徴を歌に詠みあげてゐるのであります。

わが宿の萩のうれ長し秋風の吹きなむ時に
咲かむと思ひて

この歌は、卷十、秋の雜歌に入つて居りますが、夏の萩

の若葉を詠んだものと思はれます。「萩のうれ」は、萩の若い枝さきさいふころで、みづみづしい葉の様子も眼に見えるやうであります。これは作者のわからない歌でありませんが、多分女性ではないかと思ひます。わが家の庭に萩を植ゑて、それに親しみ、朝夕に眺めてゐたものと思ひます。秋になつて萩の咲いてゐる有様を賞めるのは、それはあたり前のことではありますが、この歌はまだ秋にならない中から注意してゐるのでありまして、まことに珍しい歌と思はれます。かういふ歌に萬葉人の自然に親しむ様子がうかがへるのであります。

五月山卯の花月夜ほみぎす聞けさも飽かず
さつきやまう はなづくよ
また鳴かぬかも

これも卷十の歌で作者はわかりません。「五月山」は五月頃の山さいふころで、「卯の花月夜」は卯の花の咲いてゐるさきの月さいふころで、今の「うつき」、白い花をつけるうつき、その上に照る月さいふころで、まことに美しい言葉で

あります。そこへもう一つ初夏の鳥を以て名高いほこぎすを出してきまして、いくら聞いても飽きない。もつこ鳴いてほしいものだといふ意味の歌であります。ほこぎすを詠んだ歌は、萬葉集には澤山あります。ずるぶん愛好したものと思はれます。これは更に平安時代に及んでも衰へず、ほこぎすを詠み込んだ歌は實に多數にのぼります。さういふ數多いほこぎす讚歌の中でも、この歌は相當のものと思はれます。殊に「五月山卯の花月夜」にほこぎすの鳴いてゐる環境が自然をよよく出してきてゐるのはよいと思ひます。かういふものを鑑賞し得たのが萬葉人でありませう。

青柳の張らる河門に汝を待つこ清水は汲まず立ち平らすも

卷十四、東歌であります。作者はやはりわかりませんが、草深い關東の野に育つた、若い女性の作と思はれます。青柳の芽の張つてゐる河門——河の兩岸が狭く迫つてゐるころ——のあたりで、あなた様のお出でを待つて、清水を汲みにきたやうにして立つてゐますが、いくらしもお越しがたないので、私は自分の立つてゐるころを踏みならしたこですといふので、いささか愛する人への恨み言のやうであります。こころで、「青柳の張らる河門」をいふ言葉が、みんなにこの歌の趣を深くし、また作者の心情をも

豊かにしてゐるこであります。かういふ自然を一枚になるこいふこころに、名もなき萬葉歌人の特徴があらはれるのであります。これこそ我々日本民族の特質を以てして差支がないと思ひます。

以上無名作家の歌ばかり見てもきましたから、次は専門の歌人の作に移りませう。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の埜に船近づきぬ

これは卷三に出てゐる柿本人麿の歌であります。敏馬は、今の神戸の東方、西灘あたりの海岸だといはれて居ります。萬葉集の他の歌には「敏馬の浦は朝風に浦浪さわぎ」か「島つたひ敏馬の埜を漕ぎためば」か歌はれて居ります。野島の埜は、淡路の津名郡野島村で、岩屋の西にあたる海村であります。同じく人麿の作に「淡路の野島の埜の濱風に妹が結びし紐吹きかへす」といふのがあります。

「玉藻刈る」は一般に海邊の地名にかゝる枕詞であります。この歌では實際、海岸で美しい藻を刈り取つてゐたのではないかと思はれます。また「夏草の」といふのも「野島の」の「野」にかゝる枕詞ではありますが、實際は夏草の繁る頃であつたので、實景をも兼ねてゐるのかと思はれます。一首の意味は、美しい藻を刈る敏馬の浦を過ぎて、自分の乗つてゐる船は、夏草の野島の埜に近づいたといふのであります。一首の中に二箇所も地名を詠み込み、それに枕詞を

二度も使ひ、全く珍しい歌であります。ところが、この歌には船旅の氣持のよさや、海岸の美しい景色なきがしつかり詠みあげられてゐるのであります。人麿が難波を船出して、海岸傳ひに敏馬の浦を過ぎ、西へ向かつて行つたのであります。今日、西から東へ来るききにもかういふ感がありました。私は先年五月の中旬夜に別府を出發し、瀬戸内海をすぎて、朝に淡路の島かげを通りましたが、「夏草の野島の埒に船近つきぬ」こいふ感——胸のききめくを感じました。これは千古に輝く絶唱であり、人麿の作の中でも優れたものと思はれます。

ものゝふのやそ宇治河の網代木あむらぎにいさよふ浪のゆくへ知らずも

これも卷三にある柿本人麿の作で、人麿が近江國から大和の國へ来るとき、山城の宇治河のほとりて詠んだ作だこいふことが記してあります。「ものゝふのやそ」は、宇治河にかゝる序で、ものゝふは朝廷に仕へた人達で、八十伴緒さもいひました。その百官の氏々が多いさいふので八十氏さつづけ、その「氏」を「宇治河」の宇治にかけた言ひ方であります。歌の意味は、宇治河の網代木にせかれて、暫く淀んでゐる水がやがて流れて行方が知れずなつてしまふこいだこいふのであります。人麿が宇治河のほとりに立つて、水の様子を見守つてゐて對した感慨であると思ひます。こ

れは宇治河の實景を詠んだものでありますが、歌の底には世の中の無常を嘆くこいふ心持も籠つてゐるやうであります。無常観さいひましても、ただ知識的に注入されたものでなく、深く自然に親しみ、そこから湧き上つてきた感でありまして、これこそ純日本人の思想さいふこが出來ます。

さざれ波磯なみせ巨勢路こせぢなる能登湍河音のなせのさやけさたぎつ瀬毎せごとに

同じく卷三にあつて、波多朝臣なみの少足せうそくさいふ人の作であります。能登湍河は、大和の高市郡にある河で、大和川の支流の曾我川が、その上流において巨勢を流れるききの名で、他の巻にも「巨勢なる能登湍河」こいふ歌があります。「さざれ波磯」は巨勢の序詞で「ものゝふのやそ宇治河」に似た言ひ方であります。人麿の宇治河の歌は、水の流の有様——眼に訴へるこを詠んでゐたのでありますが、この歌は、瀬毎せごとに立てる河音の清らさを賞讃したもので、耳に訴へる方の側であります。私もずつこ以前秋晴の日に、この巨勢路の能登湍河のほとりに立つて、川音に耳をすましたのであります。清澄な氣分は實に言ひ難いものがあります。そして古人が既にこのやうな境地に達してゐたこに驚いたのであります。この歌を口ずさみますと、さながら音楽をきくやうな河の音がひびいてまゐるではありませんか。

和歌の浦に潮満ち来れば瀉かたを無なみ葦あし邊へをさして鶴鳴たづきわたる

卷六にあり山部赤人の作であります。何時の事かわかりませんが、天皇の行幸のお伴をして紀州に出かけた時の作といふことが、注記されてゐます。天皇ご申すのは、聖武天皇のごころであります。奈良時代の最盛期の作といふことになります。和歌の浦に潮がさして来るに、干瀉かたがなくなるので、葦あしの生えてゐる邊へ鶴つるが鳴きながら移つてゆくといふ歌であります。一讀して、その調の美しさに魅せられてしまひます。實によく整つた美しさで、我が國の自然をうつつして居ります。赤人こそは、萬葉集の自然禮讚の最高調を行く人であります。

み吉野の象山きやまのまの木末こゝろにはこゝだもさわぐ鳥の聲こゝろかも

ぬばたまの夜のふけゆけばひさ木生こゝろふる清き河原に千鳥しば鳴く

いづれも赤人の傑作であります。なほ赤人には春の野に董こむぎつみにさ來し吾ぞ野をなつかしみ一夜寢なにける

こいふ歌があります。「野原がなつかしいので一夜春の野で寢た」といふのは、全く自然の中に没入した境地であります。

赤人のかういふ境地が更に一轉化して、萬葉時代の末期になります。大伴家持の左のやうな歌になります。

春の野に霞あせたなびきうらがなしこの夕かげに鶯うらうら鳴くもわが宿のいささ群むら竹たけ吹く風の音のかそけきこの夕かもうらうらに照れる春日に雲雀うらうらあがり心かなしもひこりし思へば

この歌は、孝謙天皇の御代の天平勝寶五年の二月二十三日と二十五日に詠まれたもので今から凡そ千二百十七年前の作であります。その優雅な調はまさに正倉院の御物の器具類にあらはれてゐるのと同じする氣がいたします。鶯うらうらや雲雀うらうらの聲に耳を傾け、また竹の葉すれの音をたのしむといふ靜寂しずけそのものゝ歌境うたのまはであります。

春の苑のち紅べににはふ桃の花うづも下照したてる道に出で立つ少女これも家持の作であります。前の作はまた變つた情緒こころ、はなやかな方面が出てゐます。

かうして萬葉人の自然に親しむ作を通じて見てきますと、今日の私わたしもが色々いろいろ教へられるやうな氣がいたします。